

保育行政の貧困

莊司 雅子

日本保育学会が創設されて、今年で四十五回を迎える。この四十五年間の学会の発展ふりはめざましい。会員数は三千名をこえ、研究発表も四百件に近い。この量的な発展はもちろん必ずしも質的発展を意味するとはいえない。しかし会員の研究の旺盛な点においては他の学会にまさるとも劣らない。研究の範囲も次第に広がってきている。初期の段階では発表会場も二、三か所でよかったが、近年は三十数か所に増えてきている。

研究内容を見ると保育史、保育内容、保育方法、カリキュラム、幼児の心身発達が主であったが、近年はさらに保育者養成、障害児保育の研究が行われてきている。しかし、保育制度、特に保育行政の研

究はあまり見られない。なるほど何を教え、如何に教えるかという問題は現場の保育者にとって最も切実な問題である。だから研究発表が保育内容や保育方法に偏るのは無理もないことである。ただ、この内容と方法を裏付ける保育思想、保育理論等の研究がもっと真剣に取り上げられなければならない。というのは理論と思想の裏付けのない技術や方法は、しばしば行き詰まりを生ずるからである。たとえば、既成の保育内容や保育方法ですべての子どもを保育すれば、必ずその物差しに合わない幼児が出て来る。その際、保育者は悩む。大学で身につけた保育の内容や方法だけですべての子どもに適用すれば、必ずや落ちこぼれがでてくる。もし保育者が内

容や方法の理論を身につけていけば臨機応変に子ども
の個性や発達に即した保育を行うことができる。

その意味で幼児教育の研究は、理論と実践を結び付
けて行わなくてはならない。そう考える時、学会の
研究発表はもっと基本的なもの、思想的なものにな
ければならない。

学会の発表の内容をみると、一人一人の子どもの
個性を發揮させるための保育の内容や方法に関する
研究がある。なるほど、理論と実践の結び付きにお
ける研究ではある。ところがそういう研究発表があ
っても現場の実践においてはなかなか一人一人の
子どもを静かに見つめ、その個性に応じた保育をす
ることが難しい。そこで保育者は色々悩むが、その
理由をきわめることをあまり行わない。

思うに一人の保育者が三十人、四十人もの多くの
子どもを短時間に保育するから、一人一人の子ども
に接し、その個性をとらえることはいかに熟達した

園長といえど至難のわざである。学会での研究発表
においては個性を發揮させる保育の内容と方法を理
論的に発表するが、しかし現場にかえってそれを実
践することは容易ではない。ところがその原因を極
めるような研究はあまりなされていない。ただ与え
られたクラスサイズで短時間に、一斉に保育するこ
とを繰り返さざるをえない。

そこで保育の効果をあげるためには保育の制度や
行政に訴えていかなければならない。そのためには
もっと保育の制度や行政についての研究発表が盛ん
におこなわれなくてはならない。保育の効果の上が
らない大きな原因の一つは長年にわたる保育行政の
貧困にあるということを訴えなければならぬ。そ
の訴えを公けにし、世論に訴え、やがてそれを国会
にもちこむ運動にする必要があると思う。

(前・日本保育学会会長)